宗像

発行所　宗像大社
毎月一日発行
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代②1911
定価一年送料共　500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店
本社
福岡市吉塚一丁目三番三号（〒八三）
電話福岡（九二）六五一九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（三五）三四一三三四（代）一三四番

悪天候をついて
沖津宮現地大祭無事斎行

宗像大社恒例の沖津宮現地大祭は去る五月二十七日、無事沖ノ島に渡島して斎行された。

当大祭は年一度、沖ノ島に渡島して行われる沖津宮の大祭であるが、一般には年一度の沖津宮詣でのチャンスとして知られている。例年この大祭の参拝者は公募され、約七十名の参拝団を組み、海上保安庁の巡視船に便乗して渡島していたのであるが、関係筋の通達により今年は参拝団の数が大幅に削減され、その数四十名となった。

この為、沖中尚宮奉賛会始め関係者はもとより、参拝希望者も大いにとまどい、落胆した次第である。というのも参拝団に加われるかどうかの確率が悪くなったわけで、その競争率は実に七ノ八倍であった。これは人員削減もさることながら、沖ノ島が学術調査などで広く識られたことや、今年は大祭日が日曜日になったことなどの事由によるものと思われる。

選考は申込先着順を基本に厳重に行われ、本年度参拝団にもれた方は来年度の選考の資料に供し加味することとなった。

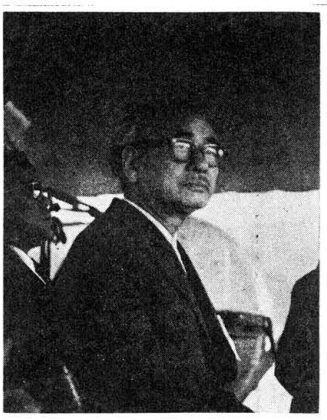
祭儀は大祭前日の二十六日、まず参拝団名位の受付を済ませ、午後七時過ぎ夕闇のせまった中津宮で宮祭が厳かに斎行された。

その后、空模様がやや悪くなり天気予報によると明日は前線通過で雨、海上も時化るとあって、参拝者も気が気でない様子を見せながら、各々の参籠宿舎に向かった。

翌二十七日、午前五時、わずかに明るくなった空に雲が少ない。皆信じられない表情であったが、一心に通ず、これぞ天祐神助と喜び合いつつ渡島。午前九時に予定通り祭典を斎行することができた。帰りは向い風が強くなり船は大揺れに揺れ、大半がグロッキーになったが全員無事本島に着島した。

尚、当大祭に福岡出身の人間国宝児島寿蔵氏が参拝された。氏は歌人、彫刻家として著名で、紙塑人形の祖として人間国宝に指定されている。

写真は海水禊を終え、急坂で足元の悪い参道を一列になって登る参拝団一行。下は巡視船〝よしの〟から沖ノ島を眺める人間国宝鹿児島寿蔵氏。



宗像大社　責任役員会開かる

去る五月十二日、宗像大社責任役員会が開かれた。

先般辞任された宮林、椙根両役員の後任として西鉄社長吉本弘次氏が就任出席された。

引き続き開会挨拶の後、昭和四十七年度決算書が上程され、異議なく可決承認された。

昭和四十七年度決算については歳入が歳出を少し上回り、社の運営が健全になされていることを示している。

次に沖津宮境内に日本海々戦記念碑建立願の件が審議されたが、日本海海戦を顕彰する場所として宗像郡玄海町に東郷公園があり記念碑は同公園に建立するのが最適であること、又沖ノ島には多数の人々が渡島できないので記念碑を建立したとしても顕彰の意味のない旨説かれた。

次に近年開発ブームに乗って、神社周辺の土地開発の気運があるとの現況報告に基づき、夫々の問題点に具体的検討がなされた。

この結果、神社は史跡であるので、史跡を保護する立場で乱開発が行われないよう見守って行きたい、この為には関係機関と連絡を密にし、場合によっては、強力な運動を推進することも必要との意見が承された。

この後、沖津宮勤務に関して、従来通り十日毎の勤務交替を行う。沖津宮と辺津宮間に無線電話を設置する。沖ノ島灯台が無人化された場合勤務を二人制とする等の報告があって正午過ぎ閉会した。

【御案内】

◇　◇

夏越大祭について

左記の様に夏越大祭を執り行いますので御参拝下さいます様御案内申し上げます

記

一、七月三十一日　午后五時大祓神事

一、八月一、二日　午前十時、夏越大祭。

論説
鰌の説法

弘法大師が唐から帰朝した時、上陸直後に貧言二宗派の第一着手として筑前宗像の海辺に近い幽寂の浜台を選んで、堂宇を創建した。爾来一千余年信仰の流れ脈々として今日に至っているが、過ぎる敗戦後の混乱期は檀家のない山門の存立を危くした。神も仏もあるもの国民この塗炭の苦しみは、の投げやりの世相は一寺の経事情など問題にしない。住職は念仏は食えず、逃げ出した。本山はこの由緒ある寺を、背に腹は替えられぬ結論として、廃寺と決める外なかった。

これに待ったをかけた僧侶がある。本山に上申して自ら再建を買って出た。廃寺の悲運を辿る寺に入る。馬鹿ではないかと利巧な宗教者は思った違いない。

仏恩は馬鹿を見殺しにはしない。貧乏寺に発願の燈火は点ぜられたが、荒れ寺は一挙に見違えるほどの姿にはならない。和尚は貧乏世帯のやりくりに辛苦の苦し、これに協力する名い妻女は皿一枚から買いととのえる刻苦の経営、稔りの秋は見通せなくても、夫妻の執念は法大師の法雨に見離されることはなかった。

「鰌は便所に住んでいます」と、小学校の教室で女生徒が答えた。鰌はどこに居るかたずねた教師は驚いた違いない。この突飛な答えを至極まじめに出したのは、和尚の娘であった。

左官を使う金がない。便所の壁塗りは、池辺の泥を運ぶ和尚の勤労の汗で続けられた。ある朝塗り立ての壁から這い出た鰌を、和尚の娘は観察した。鰌の住みかは便所であると。

一夜和尚と歓談した時、塗り掛められた鰌の話を聞いた。まことに不遜な鰌めと、笑いながら話す和尚。然し、聞く方は笑えなかった。再建の奇縁は便所を這う鰌にあった。仏法の妙機は〝鰌のすみかは便所である〟と、答えた愛嬢の奇言にあった。休まぬ精進の泥手と汗が、協力者を作った。

現在この貧乏寺は立派に再興した。教師を驚かした女児は、今日は成人して夫君と共に寺を守っている。廃寺の悲運は、便所の鰌に救われた。宗祖の恵みは、仏道の霊性を失わない。

「味噌すった昔もありて緋の衣」今この和尚は、寺の経事を若い後継者に委ねて、本山の要職に就いている。努力と才智が不屈不撓の精進の実績を見せ、衆目は彼を本山の運営に登場せしめた。述べることも書くことも簡単だが、石を運び釘を打ち壁を塗る真っ黒の労働、粗食で空腹を凌ぎ教えで寒さに勝つ辛抱、その歳月は決して短かくはなかったのである。

同じ福岡地方の或る山村に、五十年前鰌の説法を聞いた村長があった。田植えがすんだら、かねて計画していた植樹を実行に移すため、田んぼを歩き廻っては排作の村民に協力を頼んだ。雨もいとわない。ゴム長靴を脱いで畦道に残し、裸足で村中を廻る日が続く。

「村長さんの経歴とわかって、とどけようとした中から鰌が出てきた。子孫のために言われては、反対も出来なかったが、松林の苗植えは、当時気の進まない者も多かっただろう」。

「村長は死ぬ前に病床から毎日緑の山を眺め、村のために良い遺産になるように、と祈り続けたと聞くが、率先老体を押しての造林は苦しかったであろう」。

みことな村育林は、今日二村合併後の町財政を助けている。役場や学校の改築をはじめ、大きな財源となって村民に何の負担もかけずに新規事業を進め、財源は村林の一部伐採で賄われている。先輩の労苦ここに光る。

現町長もこの造林村長の業績に無言の教訓をうけ、開発の名において破壊される村の自然と先祖の心を守ることに町政の方向を見つめていると言う。全国でも珍しい全町各戸の電話架設は、生活保護をうける家庭を除外しなかった。暇を見つけては大都市周辺の農山村を視察し、開発とか過疎とかの諸問題を調査し、住民福祉のための百年の計を怠らない。そして滔々たる時代変遷の中に、新しい村造りが先祖の心を守りつつ進められてゆく。

理解し得ない他人の冷笑を浴びても、道のために人のために信条を貫ぬく生き方は峻しい。危険もある。壁塗り和尚も造林村長も、共に鰌の説法を聞いて、祈求する殿堂と美林を恵まれたのである。

（白雲）

阿蒙少言

H会社の大阪営業所に勤務する四男が、手紙を書くのは面倒なのか、折々老妻に電話をかけてくる。それが珍しく手紙をよこしたことがある。父上さまもお元気ですか一条印象的、パパでなく父上さまが古来の書簡の慣習に従うて快い。去年まで家から通学し、突飛な戯言を吐いて笑わせた子が改まって手紙の文章をインスタント化しない点が面白い。○幼児のパパママはよい。敵性語などと称して排斥した戦時の指導を、今想えば滑稽である。メートルやグラムまで尺貫法に改めさせたが、大砲の照準を何町何間に変更は出来なかった。便利なものは捨てられない。激動する時代、簡略化すべきものはしなければ、近代社会の生活機能の保持は難しくなる。○然し悪の手紙に漢字の使用が少いのは気になる。何も無闇矢鱈に難しい字を列べる必要はないが、学問の能率化が教育面のインスタント化を求めて日常の食事のインスタント化と同様に味気ないものになっては情ない。漢字を覚えるのは煩雑だ非能率的だとの発想が、漢字制限となり、果ては文部省が当用漢字の枠を定めたのは誤りだと唱え、○フランスで大学生に日本語を教えている先生が、日本の大学生より漢字をよく知っている者もあると報告している。漢字の持つ味こそ日本民族の貴重な文化的特性で、これを国が制限することは民族精神を奇型にする結果と酷評する人もある。○当用漢字を定めた当初「一之」の字を探すに苦しんだ。後に世論が喧しくなって入れた。当然のことである。之の字は如何に多く使われてるか。芸能界商業界この字はなくてならぬ伝承を持っている。専門家の審議答申も鵜呑みにされない点があろう。

（白雲）

第一三二回　宗像大社歌会詠草

毎日十五日〆切　詠草到着順

福岡　桜井　ツ子
したたかに昨夜を降りたる雨の名残り八重の桜に雫しひかる

深田　中野　節子
春日射す鴉舎の屋根にうづくまり野良犬はやさし背伸びしており

東郷　藤崎　辰子
透明の袋の中に青々と茹で豆腐掬いしたたきぬ

田島　吉武　武雄
天然の緑や島の青消えて治山治水も蒼河の流れと

吉留　伊豆　仁江
風光り黒髪なびく巫子どちの瞳に新樹は輝きいたり

久留米　篠田太郎坊
宿あけの味噌汁ひたに驚きつゝ吸えば疲れの癒ゆる思いす

田久　小方　実
終戦を知らず潜める小野田様のルバング島に雨季が近づく

吉武　早川　須磨
振りおろす鍬のきらめく朝の陽に畑の土の黒くほぐるる

光岡　河村　久光
老い母に便りを書かむと机につけば朝の窓に燕がよぎる

戸畑　藤井　孝子
潦なくしも幅の絵巻き武者人形五月の空に高くひらめき

武丸　原田　リノ
九の厄を祓ひ給へと飛鳥寺の余韻のながき鐘一つつく

東京　花田文五郎
玄海の潮風吸いて成人し渡は青月の鯉の吹流し

田熊　鷲津かつ代
せはしなく藤波のまを出入りつ群がる蜂の音のかそけさ

田熊　吉田　博子
遍路道は山から里へと花曇り奥の院へと列は続きぬ

曲　天野トモエ
正助御影前会に集ふ和尚の話に耳かたむける

田久　立花　勇雄
孝婁忌に歌会もはや三度び風薫る閖に歌は溢れて

徳重　石松やす子
山かげの小暗き路をさへぎりて花房長き藤の咲きおり

福岡　桜井　ツ子
したたかに昨夜を降りたる雨の名残り八重の桜に雫しひかる

深田　中野　節子
春日射す鴉舎の屋根にうづくまり野良犬はやさし背伸びしており

東郷　藤崎　辰子
透明の袋の中に青々と茹で豆腐掬いしたたきぬ

田島　吉武　武雄
天然の緑や島の青消えて治山治水も蒼河の流れと

吉留　伊豆　仁江
風光り黒髪なびく巫子どちの瞳に新樹は輝きいたり

久留米　篠田太郎坊
宿あけの味噌汁ひたに驚きつゝ吸えば疲れの癒ゆる思いす

田久　小方　実
終戦を知らず潜める小野田様のルバング島に雨季が近づく

吉武　早川　須磨
振りおろす鍬のきらめく朝の陽に畑の土の黒くほぐるる

光岡　河村　久光
老い母に便りを書かむと机につけば朝の窓に燕がよぎる

戸畑　藤井　孝子
潦なくしも幅の絵巻き武者人形五月の空に高くひらめき

武丸　原田　リノ
九の厄を祓ひ給へと飛鳥寺の余韻のながき鐘一つつく

東京　花田文五郎
玄海の潮風吸いて成人し渡は青月の鯉の吹流し

田熊　鷲津かつ代
せはしなく藤波のまを出入りつ群がる蜂の音のかそけさ

田熊　吉田　博子
遍路道は山から里へと花曇り奥の院へと列は続きぬ

曲　天野トモエ
正助御影前会に集ふ和尚の話に耳かたむける

田久　立花　勇雄
孝婁忌に歌会もはや三度び風薫る閖に歌は溢れて

徳重　石松やす子
山かげの小暗き路をさへぎりて花房長き藤の咲きおり

福岡　麻生　初栄
離れ住みの子よりの電話は兄のみで用のたるらし既に切れおり

赤間　白木うめの
透明の袋の中に青々と茹で豆腐掬いしたたきぬ

津屋崎　麦野　時雄
さみだれの降りしきる中街を行く雨傘の水滝のごとくも

原町　八波　五月
平戸の景「勇」の歌碑によみつす山清らかに海美わしと

津屋崎　内田　久美
久々に吾娘帰り来し夕べをはしたらいて湯にひたりおり

福間　井原素比古
迷ひ来て蜜蜂一つ硝子戸をつたひ廻りて帰える術なし

宮田　片山　朝子
母の日にくれたる嫁の手作りの指輪愛めみる始めての指

津屋崎　占部　由久
朝の試歩桜並木の下ゆけば青葉がくりに宮のなく

宮田　北原　君子
日の丸の国旗はためく中にして護国神社の春祭始まる

武丸　立石ろせ乃
朝ごとに掬朝じのお幾年かわが血圧の下がることなし

戸畑　田中ハツセ
前になる学生の行く足跡を見返にふみ雨の中行く

大井　安部　重郎
此の家も男の子生れしか真澄なる五月の空に鯉幟り高し

大井　安部　静子
振りむけど又振りむけど杖つきて見送り給ふ師の君かなし

福岡　吉田　信夫
眠やかに声かけられて新しきランドセル登校す桜咲く朝

津屋崎　菱花　女
スキーより帰へりし看護婦う燵を囲み身振り手振りに話題きさり

福岡　江崎　琴子
マンションに日照うばわれすっぽりと庭も住るもいかにせん鳴呼

名残　竹原　圓
鯉登り双眼鏡につつたりと雲ひとつなき団地の空に

沖ノ島学術調査隊が視察
水害後の遺跡を踏査

沖ノ島は既報で御承知の如く、昨年六月の大豪雨で海岸より旧社務所間の参道が地すべりにより流失し、旧社務所は傾斜し地すべりの上部は島の中腹にまで及び、亀裂、断層は数拾ケ処、大木の転倒は百数拾本にも及んでいる。

今回の調査隊の渡島は、これら水害による遺跡の崩壊、遺物の流失状況の視察調査と来春上梓の予定である報告書の補足写真撮影の為になされたものである。

被害は御社殿に登る参道の左側（島の西南部）で、御社殿周辺の遺跡にはなんら異変がなかったが、旧社務所周辺特に前面の鉄鋌が出土した遺跡は全く流失してしまった。又隊員帯島中五月二十七日は日本海大海戦の記念日に当り、沖津宮では大祭が斎行され、特に保安庁の好意で巡視船による祭拝団が来島するので、前日の二十六日は写真班を除き、御社殿の周辺、参道、及び海水禊の海岸の清掃特に崩壊参道の補強を行った。帯島四日間に全島の踏査、船による調査などを行い全く充実した調査であった。

豪雨による島の災害も大であり今回の調査記として、島の地形と地質を特筆したいと思う。

島は東西約一粁、南北約半粁、周りは約四粁の大きさである。現在波止場となっている所は島の南端でここがただ一つの舟がかりの場所である。

島の長軸（東北～西南）にあって、背梁をなす山並みがある。そのほぼ中央に一ノ岳と呼ばれる海抜二四三・一米の山頂がある。島の最高所で風あたりは強いが、四周の展望がよくきき、ここに沖ノ島灯台が建っている。一ノ岳に連続して東北に向って二ノ岳（二二〇米）、三ノ岳（二一〇米）、白岳（一八〇米）、が連っている。これらの峰の南側は露出する灰白色の岩壁が屹立している。この断崖をなしている岩壁は東の方が著しく、高さ五〇米に及ぶ。この岩壁の下からは比較的急な傾斜面が平坦地を作らずに海岸まで及んでいる。

海岸には巨岩転石の集団する所が多くまた海蝕岩となって急斜面で切られ、砂浜を見ない。樹林は常緑樹の原生林が頂上まで密生している。北及び西南方は複雑な地形で谷を作り、狭いながら平地を作っている。しかし海岸は殆んど連続した絶壁で、青く澄んだ海水に深く没し海蝕洞窟などの奇景もある。水は山中には少いが海岸近くの谷間には湧水があって、日常の用水には不足しない。谷水は舟つき場附近と旧社務所横では断崖にかかって落下する。

島の地質に関しては、昭和七年鳥山武雄氏の実地踏査があり、その概報によれば、島の南斜面の下部は中世代の粘板岩で、長門、対島、朝鮮に分布するものと同時代のものらしいといわれる。海岸の波止場附近では、粘板岩の層理を断崖にみることが出来る。その他の大部分の岩石は、石英斑岩と名付くべき新しい噴出岩で、島の高所の岩質はこれであるという。また斜面地や海岸に、石英斑岩の巨塊が散在し累積しているが、遺跡に重要な関係のある岩もこの転石である。所謂岩蔭遺跡というのが、沖ノ島の祭祀遺跡の大部分をなしているが、こういう自然の条件は、この沖ノ島に祭祀遺跡を生んだ二義的な要素として閑却し得ない所である。

今回渡島のメンバーは左記の通りである。

出光美術館　井上　団平
　　　　　　阿久井長則
　　　　　　山本　政東
　　　　　　中倉　良男
　　　　　　石井　忠
　　　　　　佐田　茂
九州大学　　東　　潮
　　　　　　高橋　徹
　　　　　　東中川忠美

（旧社務所前、流失した大量の土砂）

チマキを食べて大喜び
恒例の五月・浜宮祭斎行

新緑におう去る五月五日、子供の日、恒例の五月・浜宮祭が五月宮と浜宮でそれぞれ斎行された。

この両宮は今日、神籬と祠の形をとっているが、古き昔、海上が重要な交通路であった頃は釣川河口にあって重大な意味をもつ祭儀が盛大に行われていたのである。

古記には大社縁の摂末社の神輿がここに集ひ祭りを行ったことやここで祓をうけ辺津宮に参集したことなども見え、祓社としての由緒もある。

ともあれ今日では当地区の人々や子供たちが最も楽しみにしている祭りの一つになっている。

大人たちは菖蒲酒に、子供たちは粽に大喜び、祭典後は子供相撲大会が行われる等大変賑った。

子供の日に　幼稚園児が参拝

子供の日に因み、去る五月四日玄海町の全幼稚園児が当社に参拝、祈願殿で園児たちの健康と無病、無事故を祈る祈願祭が斎行された。

当社奨学金にと金一封
―城ケ谷の山村氏が寄付―

この程宗像大社奨学金資金運営委員会に金一封が寄せられ、同委員会を始め関係者を大いに喜ばせている。

この金一封は去る五月二十四日宗像町城ケ谷の山村和愛氏が当社を訪れ、同氏の母堂で、いまはなき山本カオル氏の名儀で寄付されたもの。

山村氏は御父君を早くなくされ御母堂カオルさんに大変苦労をさせつゝ成人されたそうだが、そのご母堂を一昨年ガンでなくされている。

和愛氏は信心深く親孝行の温厚な好人物で、御母堂が受けられた世間の恩誼を忘れず、日々感謝しておられ、氏の人格から生前の御母堂の様子が窺える。

この度の寄付は、そのせめてものご恩返しをと御母堂に縁りの金子を持って、あちらに寄付しようか、こちらに寄付しようかと思いつつ日を経ているうちに、偶々宗像誌で大社の奨学金のことを知り、当奨学金の一端に使って頂ければと馳せ参じた次第とのこと。

当社の奨学金は既報のとおり今年で九回、在校生も含め百名強に給付されてきたが、受給生は学校にあっても社会にあっても優秀なる成績を修め、りっぱに成長され、活躍されている。

この若者たちは当社の奨学金の趣旨をよく認識され、初給料や初ボーナスから多額のお金を後輩の為に役立てて下さいとか、この奨学金を長く続けて下さい、と書きそえて寄せられていることは既にお報らせのとおりである。

山村氏も当奨学金の趣旨にふれ感激したとのことで、「当社奨学生の様なりっぱな若者がどんどん育ってくれることを希っています。母もどんなにか喜こんでいることでしょう」と語っておられた。

関係者一同は金一封もさることながら、山村氏の心根にすばらしく感銘した次第である。

漫筆明暗箱 (4)
葬式順

封建の因習は、都市と云わず山村僻地と云わず今日では概ね改まって、身分貧富の別がなくなったのはよいが、日本家屋の場合席の上下が残っていて、会合の席の譲り合いがうるさい。床の間も洋式住居には姿を残していないが、日本家屋ではこれが上下の基準になる。床の間一幅の懸軸一鉢の生花に、日本の心が宿り味が匂う。

「では葬式順に坐って頂きましょう」と、皮肉屋で頓智のある世話役が宣言する。譲り合いは止んで、笑いながら席が定る。先頃信州木曽えの旅で、参勤交代の大名を泊めた本陣や脇本陣を見たことがある。ともに宿場の最上位の家筋で、苗字帯刀を許された村役。

造りは忍者の潜入防備まで気を配り、囲炉裡の位置とその席順はやかましい定めがあった。今は前時代の生きた化石で、ここに坐るのに葬式順の宣言はいらない。

木曽のついでに、印象に残る感懐を蛇足にすれば、妙心寺に属する禅寺、街道の案内書き、洪水対策の石組み等がある。葷酒入門を拒む石標はあったが、応待の僧は酒飲み顔であり、この辺は罪の産地でもある。本堂裏の附属棟に何千体かの位牌が並ぶ。「仏になってまで差別してはならないので、位牌の大きさ形式を全部同じにしている」と、聊か民主平等の新味を見せたつもりらしい。

辻の説明板は、封建社会の圧制と屈従を強い口調で指摘しているような書きぶり「この道は支配権力の圧制と横暴の道であり、それに苦しんだ住民の哀しい服従の道である」と書いた文化財保存氏は反骨と想える。たしかに物資乏しく圧制に苦しんだ封建の世、反骨は故郷を飛び出して無宿者となる因縁にあった。現代も異色の人物が少くはない。

「観光の風物などと云うが、道路も堤防も数百年前無理に狩り出された貧しい人々の血涙の名残りですよ」とベレー帽の一行が語りつつ往く「やっぱり権力が押しつけた当時の公害かな」との声もあった。

さて、老骨の身辺に話を戻す。南方の陸海に散った同胞の遺骨の問題等が放送されると、茶の間は墓地の設定に話が及ぶ。祖先の地と云っても遠ければ供養の足が遠のくから、近くがよいとの主張が出る。若い者達にあまり孝心も見られないが、盆だ命日だと人が云えば世間えのミエもあるらしい。

「都会地周辺は宅地道路の開発で墓地が邪魔になってきた。田舎でも勝手な墓碑を思い思いに建てては障害になると、近来納骨堂がふえてきたが、あれには入りたくもないし中途からの仲間入りは面倒だ。骨壷を玄海灘に沈めよ。墓石もいらないし公害にも邪魔にもなるまい」との意見を出す。

自分の先祖だけでも、何千何万の遺骨がある筈だが、数代前の墓所はあってもそれ以前のことは雲消霧散。自身もやがて同じことになる。それに異論はないが。

文化財的価値ある古代墓地、歴史上の人物の遺跡、それらは公的保存の処置があってよかろう。名もなき風愚の霊はどこで眠っていてもよいのでと墓碑無用論を折々披露していたところ、老妻はこっそり某宗教法人の団体が開設した墓地公園に、何がしかの権利金を納めて加入した。何十万円かのへそくりを払っての死ぬ準備も大変なものである。

「家からも近いし見晴らしのよい緑の山、お参りに便利だし霊園事務所もあって管理もよいから安心」と、大いに企画者の着眼を賞める。「年令から見ると、先ずこちらがそこえ納まる計算になるが葬式順は手廻わしよくは運ばないぞ」と笑ってやる。

誘われて現地を視察した。風景よく交通の便利な処。勝手な墓石を建てず、広さも体裁も各家一律で好感が持てたので賛成する。

地球に出て来る時も、父母の結婚から始って手数だったろうが、地球と別れるのも容易ではない。過ぐる大戦に従軍して、どこかの山野に屍をさらす覚悟をしたこともあったが、墓地公園と銘うった墓場に納まる予約が出来て感無量。おだやかに地球と永遠のお別れをするために。（落花生）

神湊（こうのみなと）(30)
楠　早鳥作　福田長庵画

使者　その五

その日の夕方、山口の盆地を見おろす龍門岳の峠に二人は立った夕焼に映える街衢を眺めて、遥に来つるものかなと感慨が先ず胸をついた。

仙崎の藩士に聞いた通り峠の砦に行き来意を告げた、森田掃部信義と名乗る若い武士が砦の将をしていた。

「筑前宗像殿の使いとはそこもとか、昨夜遅く仙崎からの報らせで心得ている。御館主は明後日接見なさる由だ、明日山口から案内の者が参るので今宵はここで泊られるがよかろう、手狭ではあるがごゆるりとくつろがれよ」

と言い小者に案内させた。旅装を解きくつろいでいると、酒壷を手にして森田掃部が現われ、山菜を料理した膳が運ばれた。

「先ず一献、この様な場所柄なんのご馳走もなく痛み入ります。御妻女は吾等に遠慮なく食事をしたため下さい」

お互の土器に酒をつぎ一口あおって膝を乗り出し、

「時に宗像殿の先年の菊地との手合せまことに見事でありましたな、細作（密偵）の報告によれば近年お召しかかえの者の采配によるとか、水軍の利をこれほど巧みに用いられた戦は御座るまい、その御仁は年かっこうといい言葉のなまりといい貴殿とお見うけ申したが如何」

若者は―弾正明継は大内の諜報網に内心舌を巻き、諸しても現われること、非礼にとられれば今後の交渉に影響するやもしれぬと思い、

「実は貴殿のお話の通り先頃の菊地殿との手合せには、いささかの采配をとらせて頂きました、浪々の身をお採り上げ下されたあるじ氏俊の命に応えるべくまかり越しました、以後よしなにお頼み申し上げる」

と告げた。

「いや、有態をお話し願えて全く辱ない。実は今のことは山口からの命令で若しその仁であれば通せ、さもなくばおって沙汰あるまで砦に止めておけときついお達しで」

と内情を語り弾正明継に問われるままに大内氏のこと海賊のことについて語った。

太平記や梅松論に出てくる吉野時代初期の防長海賊の活躍に関する記事などから推して、当時周防長門の沿海に夥しい海賊がいたことは容易に想像せられる。弘世以前に大内氏が、正式に中国朝鮮と交易したことがないにもかかわらず、弘世の初上洛に持参した土産物の中に新渡の唐物や、数万貫の中国銭のあったことはこれらの大内氏麾下の海賊が吉野時代の混乱に乗じ、北九州の海賊群と共に大陸並びに朝鮮半島の沿海地方に進出したことを裏書きするものにほかならない、そのことごとくが倭寇として暴力を振ったものではなく中にはおだやかに交易を行ったものもあったであろうが、ともかくも大内氏と倭寇とは一体不可分の関係にあり、弘世が防長両国を統一した頃には、大内氏はその優れた武力とともに極めて豊かな経済力に恵まれていたことに注意しなければならない。弘世の晩年から義弘の時代にかけて大内氏は飛躍的な発展を遂げたのであるが、その大内氏の強みは領内に有力な海賊をもちまた広く瀬戸内海及び北九州の海賊に対し支配的な立場をかち得たことにあった。とくに吉野時代のように、諸国に宮方と武家方とが対立していて、陸上の交通の困難な時代においては、国境のない海上の勢力は陸上の勢力以上に重要な意味をもっていた。大内氏の発展はこれらの海賊が提供する海軍力に負うところが大きく外国との貿易もまた同じく海賊の提供する海軍力があってこそはじめて可能なのである。

聞き完って明継は自分の見通しに確信をもった、芸予の海賊衆に話し合う前に先ず防長海賊を支配する大内氏と談合し、宮方勢力の強い芸予海賊を背後より索制するこの策が当れば北九州、瀬戸内の海上権を新探題のものとすることができようしまた宗像の荷捌きも容易となる。

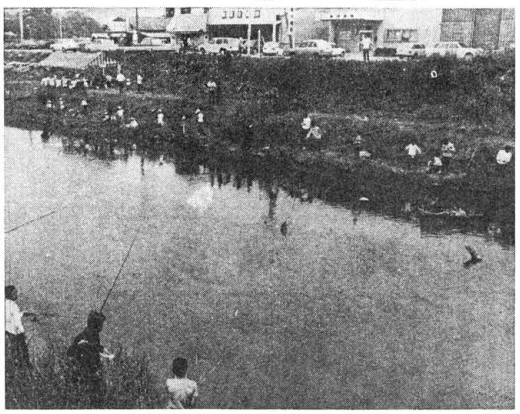
語りおえて砦に帰る信義を送って外に出た明継は遠く灯の見える山口の街並みをみた。

西国は、これから大内氏の時代に入ろう、新探題の計略から推していずれ九州は武家方に統一されよう、しかしそれまでの間、宗像は宮方、武家方抗争の中心で生き延びねばならない。

明継には宗像の命運が遠くまたたく灯のように思えた。

チビッ子天狗大はしゃぎ

―東郷で子供つり大会開催―



子供等の魚つり大会が東郷の釣川で行われて話題になった。

去る五月二十七日（日曜日）、中学生以下の子供たちを対象にした釣り大会が宗像町商工青壮年部東郷支部（支部長内田孝道）主催で行われた。

当日は約八十名のチビッ子が参加し、父兄の応援もあって大変な賑いとなった。加えて近所の大天狗や通りがかりの天狗等も足をとめて一喜一憂、あちこちで大人と子供の交歓がなされ、子供たちにとっては楽しい一日となった。

この大会は、昔ほど自由に遊ぶ場所も機会もない子供たちに楽しい一日をプレゼントしようと青壮年部が計画主催したもので、同支部地区子供会を中心に参加が呼びかけられたとのこと。

釣り会場となったのは釣川東郷橋下二〇〇米程。その部分の上下に目じるしで仕切り、子供が喜ぶ様にと主催者の方で養魚場から三〇〇匹のヒブナを購入して放流、ヨーイハジメで一斉に釣糸をたれた。

この日の優賞者は東郷橋の安部君の二〇匹。以下十位まで賞があったが、それぞれ見事な釣テクニシャンぶりで、応援の大人たちを驚かせていた。

主催者側では、この大会が大変な人気と評判を得たところから、「日頃の子供たちの求めているものにふれた様な気がする」と、今後は少くとも年一回年中行事として行なうことに決定、はりきっている。

写真は両岸に分かれ一日太公望を楽しむ子供等。

江口区全戸に消火器

―全戸分を区費で購入―

この程、宗像郡玄海町の江口区（石松綱藤区長）では、区内全戸に区費で購入した最新式の化学消火器が備えつけられたが、区の事業としても全く新しいこころみだと今評判になっている。

現在、同区には約百戸あるが、そのほとんどが数ケ所に密集しており、昨末暮に同区から出した火災が良き教訓になったとのことで、この事業のきっかけになっている。

この火事には近所中がバケツリレーで協力、大事に至らなかったが、同区住民は初期消火の大切さを痛感。

同区総会で消火器購入の話しが拡大、自衛消火手段の上からも是非必要と、区費で購入して全戸に備え、いざというとき誰でもバケツ替りに取り出せる所に消火器を置くことになった。

消火器は直径が二十センチ弱、高さが七十センチのボンベ式容器のもので、握把プッシュ式になっており取扱いが簡単。

早速消火実験などをして操作普及につとめ、万一に備えている。

同区には、以前からポンプや防火用水の備えはあったが、これで更に自衛消防体制が強化されたわけで区民も喜んでいる。

消防関係者も「バケツの替りに消火器がどっと投入されるとものすごい力を発揮するでしょう、初期消火の効果十分」と太鼓判をおしている。全国でもめずらしい防火対策である。

話題の新車をみる（四）

ニュー・ギャランの巻

本年は自動車業界始まって以来の新車需要だという。この三月の販売だけで実に十年前の昭和三十八年の一年間分に匹敵する売り上げをみせたとか。

理由は多々考えられるであろうが、昨今の地価高騰によって、マイホームの夢を断念した人達がせめて車でもと殺到したり、また週休二日制の普及が、その購買の促進に拍車をかけているようだ。

国土が狭いにかゝわらず、我国の自動車保有数は、かくの如く急増しており、平地面積当りでは、米国の八倍以上。東京を始めとする大都市やその周辺に至っては、道路許容量を遥かに上回る交通量となっており、大気汚染による深刻な公害を生んでいる事は周知の通りである。

従って何はさておき低公害車の開発を急がねばならず、環境庁としても既定方針通りの規制強化に踏み切る考えを示している。国民もなるだけ早い時期にきれいな空気をとりもどすことを望んでいるし、業界としてもその技術開発に全力を傾けているように思われる。

扨て今回は三菱の流れるようなスタイリングをもつ大衆乗用車「ギャランシリーズ」の新型車「ニューギャラン」を紹介したい。

まず、エクステリアについては一六〇〇CC・一八五〇CC・二〇〇〇CCの三種の排気種別があり、セダンは一六〇〇（七種）・一八五〇（三種）・二〇〇〇（三種）、ハードトップは一六〇〇（四種）・一八五〇（五種）で全部で二十二車種の登場となったもの。

これまでのギャランより全長で十二センチ長くなり（四二〇〇センチ）、ロングノーズを強調した他、四十八年排気ガス規制を施したのが大きな特徴となっている。

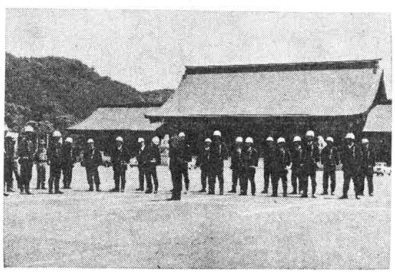
エンジンの三菱ではレシプロエンジンでの無公害化を主張しており、今回の排気量一六〇〇の車にはサターンエンジンが、一八五〇と二〇〇〇シリーズにはアストロン（天空の意）と呼ぶエンジンが搭載されており、共に四十八年排気ガス規制に適合しているものである。

今回の特色として、ニューギャランシリーズの中に低公害車として一八〇〇のGL－MCAⅡと同デラッス－MCAⅡが登場したことであろう。

これは、公害対策第二段階目の車で、既にクリーンなエンジンとして定評のあるMCA－Iサターンに、エアポンプとEMAO（エキゾースト・マニホールドエアー・オキシデション）を装置したもので、シリンダー内とマニホールド内で、再度の燃焼をしてCO・HCの排出を防ぐ構造のもの。

当社駐車場で

郡内新消防団員の合同訓練



キォツケー！ピリッとした号令が当社駐車場に響きわたる。

五月十四日、福岡県消防協会宗像支部（支部長田中正隆氏）主催の郡内消防団新入団員合同訓練が当社駐車場で行われた。

郡内の新入団員は約一二〇名で午前中は消防法規、午後は操練と一日ビッシリのスケジュールで訓練が行われた。

特に午後の操練は厳しく、次々に発せられる号令にとまどいを見せながらも終始キビキビした動作を見せていた。

（写真は晴天の中、祈願殿を背に消防訓練に励むニューハッピの新団員の雄姿）

たくましき老人たち

―郡老人クラブ幹部講習会―

去る五月十日、当社宿衛舎に於いて宗像郡内老人クラブ幹部講習会が行われた。

当日は約七十名の老人が参加し、午前九時から正午まで講義と討論、午後からは映画に意見発表といったプログラムで進行され、熱心な受講態度と活発な意見交換で終始し、関係者も感心されていた。

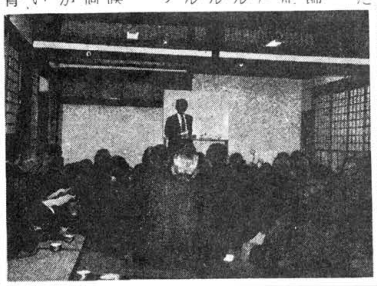
午後の映画は、特に関係者より要請があったため、当社記録映画〝神々はよみがえる〟が上映され、続いて福岡県の専門講師により〝たくましき老人たち〟が上映された。

映画終了後、県講師の指導のもとに、前記の〝たくましき老人たち〟について、一グループ十人前後の数グループに分かれ、各グループごとのディスカッションがなされた。

各グループとも、映画の中のそれぞれの個性と特技をうまく生かして遅ましく生きている姿、老人等の〝再青春〟ともいうべき活動に感銘され老人相互間の連帯と助け合い、生活に張りを持ち遅しく生きて行くことの大切さについて活発な意見の交換がなされた。

また、そういったことを指導者として、多くの人にいかに教えていったら良いかといった問題などもとり上げられ、真剣に討議されるなど内容豊富な講習会となり、まさに「ディスカバー老人」の一日であった。

（写真は県講師の話に聴き入る老人クラブ幹部の方々）



宗像史蹟（一）

許斐山（このみ）（五）

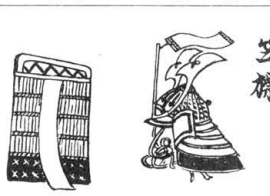
㈥天正七年（一五七九年）十二月下旬遠賀郡山鹿の城主麻生上総介元重、許斐山の城主許斐左馬太夫氏備、鞍手郡龍ケ岳の城主松権守連連らは相謀って立花を討たんがため粕屋郡に出陣した。それで立花でも城主戸次丹後守鑑連も多数の軍勢を出して、両軍は火花を散らして戦った。

この時立花方では一計をめぐらし許斐山城に兵力のないのを幸に、十二月廿九日の夜、戸次左馬助、薦野三河守の両人に命じ、一千余の軍勢で、ひそかに許斐山城に押寄せた。直ちに城に乱入して、居合せた許斐の妻女らを斬り伏せ、別に番人をおいて、立花に退いた。

粕屋の陣営でこれを聞いた松、麻生、許斐の三氏は驚いて、急ぎ士卒を集めて引返したが、敵勢もはや去った後で、空しく徳重の城に退いた。宗像大宮司氏貞は、これを知ると烈火の如く怒り、城主許斐氏以下百余人を大島に流した。

許斐左馬太夫氏備はこのたびの失策に、何とかしてこの屈辱を払わねばと種々画策をめぐらし、先づ脇野与九郎と謀って許斐山城の様子を探らせた。

天正八年（一五八〇年）十二月晦日の夜、脇野を手引きとして氏備はじめ石松新九郎、神屋源左衛門以下百余人を従え、風雨にまぎれて許斐山に忍びより、時刻をはかって一度にどっと鬨の声をあげて、城中に入り、諸所に火をかけた。不意を討たれた城兵は、あわてふためき、為すところを知らず、山をかけ下って四方に散乱した。見事にその目的を達した氏備は、ふたたび許斐山城を保つことができた。



笠標

㈦天正十一年（一五八三年）三月立花の城主立花道雪、太宰府岩屋の城主高橋紹運が相謀って宗像大宮司家を滅亡させんものと、その軍勢二千五百余で宗像に押し寄せた。宗像では大宮司氏貞がこれを聞くと二千余の兵力で迎え撃ち、両軍は吉原口で激戦した。何しろ一代の名だたる勇将といわれた高橋紹運の攻撃には、宗像勢の力戦奪斗も空しく、大敗を喫し、白山城と蔦ケ嶽城に退去した。当時許斐山城には宗像民部が拠っていたが、道雪、紹運の軍勢に山は包囲され、守将民部をはじめ城兵は力の限り防戦に努めたが、氏貞の援軍も来なかったので、ついに力尽き、暗夜を幸に、城を抜け出て、大島へ退いた。よって道雪、紹運は、適当な人数を城に常駐させて、一旦帰陣した。

天正七年以来の許斐山城の戦は元亀二年立花家と宗像家の縁組による和睦のため、一度も合戦はないと「宗像記」にあるが、その真偽については不明な点があることを追加しておきたい。

（田中政喜記）

《社務日誌抄》

五月
一日　月次祭
三日　靖国神社権宮司参拝
四日　玄海幼稚園児参拝
五日　五月、浜宮祭
七日　宗像警察署月次祭
　出光徳山製油所内田次長（前復興事務局長）造営誌の件にて来社、
八日　会計監査を斎館で開催
　井上光貞東大教授来社
九日　宇佐市納税組合員参拝
十二日　責任役員会開催
十三日　出光千葉製油所新造船祈願
十四日　宗像郡消防団新入団員合同訓練於当社駐車場
十五日　月次祭
十六日　出光興産福岡支店長並び、大阪支店長外十名参拝
十七日　出光徳山製油所新入社員四十七名参拝
十八日　千葉の出光中央研究所内に宗像神社創建さるにより、同鎮座祭が現地で斎行さる。
　前日夜半に鎮座祭、本日鎮座奉祝祭
二十一日防衛庁検査官一行玄海町当局者案内にて参拝
二十五日石川島播磨重工業㈱、呉造船所第一工場長外十一名、出光タンカー赤間丸起工々事安全祈願の為来社、
　沖ノ島調査団、二十九日迄、祭祀遺跡保存と補足撮影の為に沖ノ島に渡島。
二十七日沖津宮現地大祭斎行

【お知らせ】

宗像大社歌会互選会開催日を変更

互選会の開催日が六月から毎月二十日午後一時より行われるように変更されました

毎月第三日曜日に行われていました互選会は、老人大学入学の会員の増加にともない老人大学と重ならない日に行ってほしいという要望があり、今後は毎月二十日に開催されることになった次第であります。

今後共おさそい合せの上、こぞって御参加下さいます様、御案内申し上げます。

酒処

清酒「鳳凰大観」

翁酒造株式会社の巻（5）

今回は粕屋郡古賀町久保の地で清酒・焼酎・清酒用原料アルコールを製造されている翁酒造株式会社を訪ねてみた。

この会社は粕屋郡須恵町で酒造業を創設、大正十二年安河内合名会社を設立し清酒「須恵の松」を醸造、次いで昭和二十四年新式蒸留酒製造機をそなえた古賀工場を建設し清酒原料用アルコール及び「翁焼酎」を発売、翌二十五年十一月二十七日現称にて独立、取締役社長に安河内酒造五代目安河内末男氏が就任。昭和三十五年増資。これにより資本金一千五百万円となる。更に昭和三十七年宗像郡福間町畦町の中村酒造場の清酒酒造権を買収して福間工場を増設し清酒「鳳凰大観」を吟醸発売。

現社長安河内末男氏は明治四十年粕屋郡古賀町に生まれ昭和六年安河内家の養子となり、修猷館中学、長崎高商、大阪商科大学卒業後大蔵省醸造試験所に入所、その後家業の酒造業を継ぎ今日に至っている。因に氏が勤務された大蔵省醸造試験所は、明治三十七年に設立され、それまで杜氏の経験と勘に頼っていた酒造の方法を、科学的に解明しようと試み、今日みるような近代的な酒造業の基礎を築いた所である。中でも、酒造り中最も労力を要した山卸作業をやめたこと、乳酸を加えて醸造する方法を発明して醸造期間を短縮し安全に醸造できるようにしたこと、又その後純粋に培養した酵母菌を加える方法の発明等々は、酒造技術の大革新であった。

酒類製造　清酒「鳳凰大観」
　「須恵の松」
　焼酎甲類「オキナグレース「おきなK2」
　焼酎乙類「おきな」原料用アルコール
醸造高　清酒　一三〇〇石
　焼酎　一二〇〇石
工場　古賀工場　福間工場

宗像大社歌会 俳句作品集（二三五）

東郷有吉　春子
一日を思い惑いて春炬燵

田熊安部　ゆき
石仏の作者知らずあざみ咲く

土穴八尋　恒夫
ぼた餅をたれが上げたか道地蔵

吉留伊豆　湧泉
伶人も舞うも若きや楠若葉

東京小浦　太平
夕づけば残る花にも紅ほのか

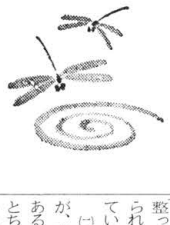
久留米篠田太郎坊
八重桜にそっと頬よせ老い寂し

大井安部　重郎
上つ代の古墳を照らす春の月

福岡入江　柳江
水温むこの橋わたる朝夕

藤沢市玄洋子
驟雨一過みどりに映えて鯉のぼり

津屋崎菱花女
梅雨未だ入らぬに葵咲き盛り



宗像大社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十五年度調査報告

沖ノ島

もしそうだとすると、一度この場で祭祀を行なったあとに、一括して、掘り込みの中に埋納したのであろうか。沖ノ島の祭祀遺跡では、これまでこの様にまつりに供したものを、特別に埋納施設をもうけたものはみられなかった。

時期的には、土器類が六号遺跡と近似した形式であり、六世紀後半に該当する。

1、奈良三彩

1号遺跡から、須恵器にまじって、奈良三彩の蓋付小壺の類が発見された。蓋と身はいずれも遊離して、くみあわさった状態で出土したものはなかった。蓋は完形2個、中破片2個体、小破片2個、身は完形8個、中破片3個体、その他蓋、身とも決定しがたい小破片1個がある。身からいえば、少くも12個体分あったことになる。

この有蓋小壺は正倉院の薬壺の形をおそっているが蓋にはつまみがあり、小形である。奈良三彩というけれども、これは白と緑の二彩で、釉が斑状またはたてにながれ縞状になっている。いまは風化して剥落しうすくなっているものがある。

小壺の身の形式からいって、三つの製作法が考えられる。㈠は底部に高台をつけたもので、5例をかぞえる。いまその1例をあげると口径三、六cm、高四、四cm高台径四、一cmをはかる。胎土も白く、うすく仕上げられ、形も整っており、白・緑の二色がかけられており、底にも釉がかけられている。

㈡は、形は㈠とおなじであるが、底が高台でなく、糸切り底であるため、底部へのカーブが前者とちがってきている。これは1例のみで、口径三、六cm、高五、二cm、底三、三cmとはかる。この糸切りより轆轤が右まわりであることがみとめられる。

㈢は、底が板底で、板目がみえている。これも1例のみで、口径三、四cm　高五、二cm　底三、五cmをはかる。

この三つの形式中、㈠は基本の形であり、㈡、㈢は㈠より出た形である。高台がないため、胴部が長くなって、背もたかくなってくるのである。

正倉院には、総数57点の奈良三彩がある。これは白・緑褐の三彩、白・緑の二彩、また各一彩の鉄鉢・銚・盤などの食器、鼓胴などの楽器、塔などがみとめられるが、三彩蓋付小壺はみられない。

大形の三彩壺は吹田市大織冠山、和歌山県高野山口など火葬骨壺に用いたものがある。沖ノ島の如き三彩小壺は、これまで奈良県天理市小治田安万侶墓、岡山県邑久郡熊山戒壇、（伝）福岡県早良郡などの外に、鳥羽市神島および、笠岡市大飛島の祭祀遺跡から蓋付小壺（高台底）が多数発見されている。大飛島では第7・8層の和銅開ほう、万年通宝、神功開宝などを含む層より発見され、隆平永宝、富寿神宝、延喜通宝など平安朝の皇朝銭を含む層よりは、三彩は発見されておらず、奈良時代の層にあったと考えられる。

奈良三彩は唐三彩の影響の下に製作されたことは明らかで、正倉院文書中の「造仏所作物帳」に三彩陶の原料が見える。沖ノ島では前回の調査で唐三彩花瓶の破片が発見され、小山富士夫先生によって解説が加えられている。昭和42年、奈良市大安寺では唐三彩の陶枕類を出土した。大安寺唐都長安に長く留学して、建築工芸の技術を学んで養老2年（七一八年）帰国した道慈の建てた寺院である。このころは唐の開元天宝代にあたり、大安寺の唐三彩もかれの帰国時にもたらされ、また奈良三彩の年代をそれを上限とする藤岡了一氏の所見も傾聴すべきものがある。

沖ノ島の奈良三彩は、大飛島、神島などとおなじく奉献に用いられていることは重要である。

2、滑石製形代

形代とは本来実物を奉献すべきところを、小形に模造した代替品をもってした器物をさしている。その滑石で模造された形代として著名なのは人形、馬形、舟形の三種である。わが国祭祀遺跡より発見される形代の中でも、沖ノ島の滑石製形代は注目されている。

すでに早くから、その存在は気付かれていたが、戦前にいくつかが将来されて宗像大社に保管されていた。第三次調査が始まるまでに知られていたのは人形12、馬形10、舟形21であったが、人形・舟形各々2個が3号遺跡であるほかはすべて4号遺跡（御金蔵）より将来されたと伝えられていた。ところが今次調査によって御金蔵の発掘調査を行なってみると、滑石製形代はその破片すら発見できず、出土品の示すところは滑石製形代を伴わない6号、8号遺跡などと共通の様相を示していて6世紀代を下らないであろうことが知られるにいたった。また1号遺跡の調査によって三種の形代が多量に発見されるとともに、この遺跡が8～9世紀代に比定されることになった。ここに滑石製形代は奈良・平安時代に限って奉献されていることが明らかにされた。御金蔵と称される社殿横の洞穴は参拝者の目につきやすいために近世にいたるまで奉献品がここに格納され、岩上や岩蔭の祭祀遺跡は忘れさられてしまったために御金蔵だけが伝承されたのである。（つづく）

二宮佐天莊主人 四島一二三伝

―原田種夫著―

四島青年は、狭いボイラーの中で這いずりをしたり、動き廻っているといくらか体が暖まって来て凍てつく寒さを逐った。ちょっとでも動くのをやめると、さっと寒烈さが還えってくる。動くのをちょっとでもやめてはならない、休むことはできないのだ。

だが、人間の体力にも限界というものがあり、次第次第に四島青年の上を疲労が霧のように掩いはじめ、動きが鈍くなり、ついに、まったく動けなくなった。凍てつく針のような寒烈さが、全身を襲ってきた。午前六時三十分まで意識があったが、それからぷっつりと意識が失せた。いわゆる凍死にいたる仮死の状態であった。

それから三時間あまりして、ふっと意識がもどった。仄かな光がボイラーの隙間からさしていた。朝だと気がついた。ボイラーの中は太陽でいくらか暖まってきていた。それで意識がもどって来たのであった。つまり、快晴で日が射しているのでボイラーの内部まで暖かくなっていたわけだ。もし曇天であったとしたら四島青年は凍死していたにちがいない。まったくの僥倖であったといわねばならぬ。午前十時ごろロスアンゼルスに着いた。その日は、ちょうど四島青年が二十才になった明治三十三年の一月元旦であった。

駅についてから駅どうりに出た。

全身にいいようもない疲労があった。腹もすっかりすいていた。そこで、ふと眼についた中国人の飲食店に飛びこんでいった。十五セントの豚豆腐と十セントのご飯を注文してゆっくり平らげた。びっくりするほどの旨さであった。そんな旨いもの二十年間口にしたことがないように思えた。

「あの時の食事のうまかったことは生涯ともに忘れることができない」

と今も四島氏は述懐して遠い日を想い出す表情をする。九死に一生を得たことの感動が、その食事をそんなにもおいしく感じさせたのであろう。死の断崖から脱出できたのである。その日がもしも曇天であったならば、貨車の内部がいよいよ冷えていき、四島青年は凍死してしまっていたにちがいない。その無賃乗車は、いってみれば、生と死の境界線を走ったということになろう。九死に一生を得たということだ。

やっと生気をとり戻した青年は、町にある日本人が経営している旅館を見つけ、懐しさも手つだって中にはいり、ベットにもぐりこんで昏々と眠りつづけた。助かったという安堵感で誠に快い眠りであった。その頃、四島青年は、四島市次という名を四島一二三と改めていた。それというのも、アメリカに労力供給業の大ボス熊本一二三という人がいて、多いときには三千人の労務者を動かすほどの人であった。なんとかして人の上に立ちたいという願いから、熊本一二三にあやかって、自分も一二三と改めていたのである。

当時、改名というのは大へんむつかしく、同じ地域に同性同名の人がいないと、改名はなかなか簡単に許可されなかったので、市次青年は、一二三に改名するため、一時、厨家の養子となり厨性を名のったことがある。これは、たまたま、厨市次という人がいたので、改名のための手段であった。

また当時は、徴兵をのがれるために、養子に行く形式にすることが流行していたが、期せずして、この役にもたったのだろう。この手続きは、手紙で依頼し、父親の久五郎氏が一切をとりはかったのである。

また四島青年の耳には、前に書いたポテト・キング牛島謹爾の話もきっと入っていたにちがいない。

人に使われないで人を使うようにならねばつまらない。という決意で全身が張りつめていた。それでなくては、遠く故国を離れてアメリカに渡って来た意味はないのだと思った。生命の危機をうまく脱出した明治三十三年、即ち、四島青年二十才の春から彼の運命は新らしく展開をはじめていくことになった。

第七章 新らしい世界

ロスアンゼルスにしばらくいる内に、外人の口入れ屋があって、英語がしゃべれる労務者がほしいということで、ついその外人についていって耕地三百町歩従業員四百五十人もいるサンタポーラの大きなレモン園に勤めることになった。サンタポーラというのは、カルフォルニヤの地図にはのっているが、小さな農業都市とみえていろいろとアメリカの地誌などを調べてみたがくわしいことはわからない。しようがないので、福岡のアメリカ領事館に頼んで調べてもらったが、よくはわからないのである。

サンタポーラは、ロスアンゼルスの北七十哩にあって、カリフォルニアの南西、ベンチュラの東十六哩に当る小都市である。一八七五年（明治八年）に町になり、やっと一九〇二年（明治三十五年）に市となった処だ。人口一五、〇〇〇人（一九六四調べ）というから、だいたい九州でいえば、豊後の高田市（人口三六、〇〇〇）より小さい都会、というより田園都市だろう。しかし、レモン生産は、世界一といわれ、罐詰、乾物、油田があり、石油精製でも知られている、世界的に今も有名なサンキスト株式会社に属するレモン園の一つがこのサンタポーラなのだ。

そこを見たことがある人々の話を総合してみると、そこは痩地であって、よく晴れた日にはシエラネバダ山脈のつづきの富士山より五〇〇米高いシャスタ山が雪をいただいているのが見えるという。レモン畑は、ピラミット型に整地され、一直線に四米おきにレモンの樹が植えられ、それが二、五〇〇米から三、〇〇〇米つづいているそうだ。亜熱帯なので雪は殆んど降らず、霰もまれにしか降らない、年中、合服一着で過ごせるよい気候のところで、ペチュニア（筑波根朝顔）が色とりどり咲いている。何か法律みたいようなもので、ペチュニアの根がはびこることを禁じられている。レモンの花は、花ことばが、香気・風味といわれるくらい芳香がある。もともと、シチリヤ島、コルシカ島、カリフォルニアなどが有名な生産地で一年中、果実を採ることができる。レモンの実は、レモンイエローといわれるように、やや青味を含む黄色である。栽培地では、一定の大きさになると緑果のうちに採ってしまう。色ずくまで枝におくと品質が落ちるからだ。

レモンは寒さにひじように弱い。摂氏三度になったらレモンは駄目になってしまうのだ。レモンの採集は、一定のサイズの輪をはめて、それに合うものから順次に採っていく。とくにクリスマス前後の十日から二週間というものは不眠不休の労働をしないといけないのだ。このときには労務者は四百四、五十人にふくれあがった。

レモン園には、あちこちにたくさんの寒暖計がおかれていて、温度が下がると一せいにベルが鳴ることになっていた。夜間に霜など降るとぐっと温度が下がって一せいにベルが鳴りわたるのである。油断ができないのだ。ベルが鳴りわたると全員一せいに起床して重油とオガクズを焚いて煙をだしてスモッグを作るのである。

沖津宮大祭詣り 沖ノ島渡航の記

「宵祭り」

神郡宗像に生まれて、「是非共一度は沖津宮に参拝を」と念願していたが、この度、幸にもその願いが果されてまことに嬉しい。

五月二十七日沖津宮大祭の日は旧日本海々戦の記念日にちなむ。

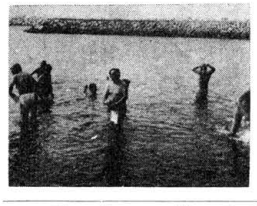
当日は保安庁の巡視艇「よしの」に便乗して田心姫命さまが鎮まります沖の島へむかうのであるが、当大祭の参加者は一日の大島参籠と宵祭参列がかせられている。そこで私は、前日廿六日午後五時の便船で大島に渡り、親友越智汎愛氏宅に一泊参籠することにした。

初夏の太陽が島影に波して海面漸く紫紺の夕暗に暮れ中津宮のボンボリが神々しくまたたく中、航海の安全を祈る「宵祭り」が行われた。

一同深く低頭し敬虔な祈りを捧げる。

「渡航」

「もう五時ですよ」と襖越しに呼ぶ声に驚いて跳ね起きた。挨拶もそこそこにして波止場へ走る。先客から一人づつ揺れるハシケに乗り移る。



汽笛と共にハシケは岸を離れる。間もなく白くスマートな艇影が眼前に現われる。接舷して直に乗船。

巡視船「よしの」は機関の響きを段々高め、砕けない大波のうねりにゆらゆらと左右に揺れながらも速力を増す。白い航跡が尾をひく。

「皇国の興廃この一戦にあり…」

「天気晴朗なれども波高し。」等の有名な文句が脳裡にひらめく。

約二時間の航海ののち前方遥かな水平線上に小さな島影がうす紫に浮んだ。沖ノ島である。

艇はぴったりと船首のねらいをつけて、まっしぐらに突き進む。

そそり立つ懸崖、青光る原始林その威圧感は俗なるものの近寄り難いものを感ずる。真に神の島である。波止場まで五百米の地点で「よしの」は碇泊、ハシケの中継ぎで上陸第一歩を印する。

「参拝」

島全体が御神体と言うこの島での行動はまず「禊」で始まる。思い切って脱衣。思い切って海水に飛び込む。

玄海の潮は思ったより冷たい。「みそぎ」を終った人から蜿々と急坂を一列になって登って行く。

道幅五十糎、角度は文字通りの胸突き八丁である。原始林の中の参道を登りやがて大巌を背に鎮まります社殿についた。

参拝者一同敬虔に社殿前に低頭すれば斎主の「祝詞」神域の冷気をふるわす。参拝後は一人一人が一列に並んで神酒を戴く。

太古の人々は果してどんな姿で、どんな文句をとなえながら、左右に屹立した大岩の前に額付いては祈ったのであろうか。

千年前の幻が眼前に彷彿する。密林の下の細道、急坂を下る。絶壁を伝って一歩一歩足元を踏みしめて緊張の連続である。

波止場迄下り着いてホッとひと息。持参の弁当を開いて海風に吹かれながら昼食。

一時頃から風が出て、外海には怒濤の白波が見える。

定刻、揺れの大きいハシケに飛び乗りさらに「よしの」へ、再び甲板上の人となった。

三時半過ぎ大島に帰着、波止場で神職の方から御供物など拝領し楽しくも有意義な沖ノ島参拝であった。

宗像高等学校
山田士之夫　記